

遠藤吉三郎が撮影した欧州海藻標本写真のガラス乾板

北山太樹¹・大和茂之²・石田晃浩³・吉田忠生⁴

遠藤吉三郎(1874—1921)が外遊時代(図1)に欧州のハーバリウムで撮影した写真のガラス乾板が、京都大学フィールド科学教育研究センター瀬戸臨海実験所(和歌山県西牟婁郡白浜町)で発見された(図2, 3)。乾板の内容や由来についての調査は始まったばかりだが、奇しくも本年8月30日が遠藤博士の140回目の生誕日であるので速報する。

このガラス乾板は、すでに存在が知られた『海藻寫真帖』の原版(ネガ)で、ながく所在が分かっていなかった。遠藤は、欧州の海藻標本を精査する目的で1911年(明治44年)から1914年にかけて英国, 独国, ノルウェーに留学(浜田1980; 北山2013)した。『海藻寫真帖』には、ダブリン(当時は英国領)のTrinity Collegeなどで撮影した標本の写真が約120枚貼付されており、初めのページにある説明文によれば、1928年(昭和3年)8月に水産講習所(現在の東京海洋大学)植物学教室が京都帝国大学瀬戸鉛山臨海実験所(現在の瀬戸臨海実験所)から借り受けて焼き付けを行い、



図1 外遊時代の遠藤吉三郎(左端)。ノルウェーの友人たちが着用する和服を模した衣裳は遠藤の発案か。遠藤嚶子氏所蔵。

アルバム形態にしたものである。筆蹟から判断して、おそらく岡村金太郎が岡田喜一に命じて制作させたと考えられる(図4)。この『海藻寫真帖』を所有する石田が今年5月に実験所の大和に問い合わせたところ、奇遇にも昨年10月、実験所内の標本室を整理していたときに、ホコリをかぶった木箱に入った由来の不明なガラス乾板が大量に見つかった。それが該当するものと分かった。大部分の乾板は紙箱に12枚ずつ納められていて、それが10箱(図2, 中央)で約120枚あり、『海藻寫真帖』に使用されたもののようである。それ以外の乾板には、海藻の生態写真や遠藤の初期のサンゴモ科論文で使用されたバンクーバー産石灰藻の標本写真などもみられる。

この乾板がなぜ瀬戸臨海実験所に置かれていたのかなど、詳細な調査はこれからだが、遠藤生誕140年目の年に遠藤研究の新資料が出現したことは感慨深い。

謝辞

図1の写真を提供してくださった遠藤嚶子氏(遠藤吉三郎の令孫)にお礼を申し上げる。

引用文献

- 浜田 稔 1980. 水産植物学者 遠藤吉三郎先生. 採集と飼育 42: 612—617.
北山太樹 2013. 海藻標本採集者列伝(2) 遠藤吉三郎(1874—1921). 海洋と生物 35: 140—141.



図2—4. 2. 木箱に納められたガラス乾板。3. ガラス乾板の1枚(京都大学所蔵)。4. 『海藻寫真帖』の序文(石田所蔵)。

(¹ 国立科学博物館, ² 京都大学瀬戸臨海実験所, ³ 海苔史研究家, ⁴ 北海道大学名誉教授)